

「まちの保健室」の活動評価 — 住民の健康づくり及び学生への教育的効果 —

Evaluation of “Machino-Hokenshitsu” Community Healthcare Activities — The effectiveness of health promotion and educational effectiveness for students —

安藤 智子・岩瀬 靖子

Tomoko ANDO and Seiko IWASE

目的：「まちの保健室」を、活動目的である地域住民の健康課題の把握と健康づくり及び学生ボランティアに対する教育的効果の観点から評価することを目的とした。

方法：対象は「まちの保健室」を利用した住民、学生ボランティア、教員で、分析に用いたデータは、参加者の自記式アンケート、学生ボランティアの自記式調査票及び教員が学生に実施した教育的支援行動の記録で、単純集計及び質的記述的分析を行った。

結果：「まちの保健室」は6回実施し、参加した住民は延182人であり、そのうち健康相談利用者は84名であった。健康相談の利用者は現病歴がない者が56%であり、治療中の者も含め特別な健康課題は把握されなかった。参加者アンケートの回答者は148人（回収率90.2%）であった。満足度は、非常に満足が62.2%、まあまあ満足が33.1%と高く、その理由は、自分の健康を振り返る機会になった12%、健康に気をつけたい19.4%であった。学生は実12人、延23人が参加した。教員は学生に【教員が基本にしている理念】に基づいて、【学生の能力に合せた教育的支援】や【活動が負担にならないための配慮】と【学生による自己評価の尊重】【教員による肯定的な評価】等の教育的支援を行っていた。11人の学生が自記式調査票に回答し（回収率91%）、「個人の健康増進のための知識が増えた」「集団の健康増進のための知識が増えた」「個人の健康増進のための技術が向上した」「集団の健康増進のための知識が向上した」は、全員が「とても思う」「そう思う」と回答した。

考察：「まちの保健室」は、隣接する商業施設を買い物又は観光で訪れた住民の参加が多く、健康課題の把握は困難であるが、健康増進を目的としたポピュレーションアプローチの機会として効果的である。また、学生の能力に合せた教育的支援により、学生の看護実践能力向上の機会となる。さらに関係機関との連携により住民サービスの向上を図ることができると考える。

1. はじめに

住民の身近な地域で、看護職が住民の健康づくりを支

連絡先：安藤智子 toando@cis.ac.jp

千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Chiba Institute of Science

(2018年10月2日受付, 2019年1月8日受理)

援する手法の一つに「まちの保健室」がある。日本看護協会が平成8年に「先駆的地域保健活動モデル事業」の1つとして「まちの保健室」モデル事業を開始し、その後、「地域における看護提供システムモデル事業」として展開、現在はほとんどの都道府県看護協会で行われている¹⁾。「まちの保健室」が継続、発展してきた要因には、開催前に関係者の合意を得るなどの準備性があること、潜在化あるいは顕在化しているニーズを把握し

ていること、関係者間の連携が良好であることの3点であるといわれている²⁾。

筆者らは、看護協会の「まちの保健室」を参考にして平成29年度に文部科学省による地（知）の拠点事業を活用した「まちの保健室」の開催を計画した。理由は、「A市における地域課題の解決を図るための地域貢献を行なう」という地（知）拠点事業の目的に鑑み、看護学部教員が行う地域貢献の手法として適切と考えたからである。看護系大学による「まちの保健室」の実践事例は、兵庫県立大学、神戸市看護大学、鳥取看護大学等が報告している。在日外国人に対する「国際まちの保健室」³⁾や子育て世代を対象にした「子育て支援まちの保健室」⁴⁾、予約制で実施する「こころと身体の見守り相談」⁵⁾、被災者ケアと融合した取り組みなど大学による特徴がある。

本学では、A市の住民全体を対象にし、活動目的を①地域住民の健康課題の把握②健康増進サービスの提供による地域貢献③学生へ付加的な教育の機会を与えることの3つに設定した。特に3番目の学生教育の機会については、筆者らの専門領域が公衆衛生看護学で、住民の健康増進を目的としたポピュレーションアプローチ方法を教授しているため、学生の実習を補完する機会になると考えたからである。前述した看護系大学による「まちの保健室」の評価研究をみると、ほとんどが参加者の変化や満足度に焦点を当てており、参加している学部生や大学院生への教育的効果は明らかではなかった。

そこで、本学で取り組んだ「まちの保健室」の評価を行なうにあたり、住民と学生に対してどのような効果があったのかを明らかにしたいと考えた。評価は3つの活動目的を柱に行なうが、評価の対象の違いにより、活動目的の①と②は研究1、③は研究2で構成することとした。

2. 研究1

2. 1 研究目的

「まちの保健室」に参加した地域住民の健康課題の把握及びそこで実施した健康増進サービスが住民に及ぼした効果を明らかにすることである。

2. 2 方法

2. 2. 1 まちの保健室の概要

日程は、平成29年7月～平成30年1月（8月を除く）第2日曜日に全6回実施した。開設時間は午後1時～3時30分とし、会場準備のため12時30分に集合し、3時30分～4時にスタッフ全員で反省会を実施した。会場は、千葉科学大学エクステンションセンター（隣に道の駅類似の施設あり）を利用した。

内容は、健康相談（血圧測定含む）、月ごとの健康教

育プログラム、看護進学相談・看護復職相談を同時進行で行なった。7月～11月のプログラムは学生が企画し運営した。12月と1月は、地域の関係者から企画と運営の協力を得た。主催者である教員2名は学生指導と会場の運営を担当した。学生ボランティア12名は、1回5～6名が交代で参加した。学生の役割は、会場周辺を歩いている住民の呼び込みとプログラムの運営であった。看護師2名は健康相談を担当した。ボランティアで協力してくれた関係者は、理学療法士1名（9月）、子育て応援隊どんぐり代表者1名（12月）、A市地域包括支援センター職員4名と認知症コーディネーター3名及び脳若トレーナー2名（1月）の11名であった。周知方法は、A市広報と地方紙の記事掲載、会場周辺の町内への隣組回覧の他、民生委員、市内の高等学校及び子育て広場利用者に対してチラシ（図1）を配布した。経費は131千円で、地（知）の拠点事業を原資とした大学の平成29年度地域志向研究経費により支出した。主な支出内訳は、ボランティア保険料、看護師謝金、チラシ印刷代、プログラムに必要な文具類等であった。

学生によるプログラム実施の様子を図2、図3に示す。

2. 2. 2 研究デザイン

記述統計を用いた。選択項目は単純集計を行い、自由記述については類似する内容をまとめ、数を集計した。

2. 2. 3 データ収集期間

平成29年7月9日から平成30年1月14日であった。

2. 2. 4 研究対象者

「まちの保健室」に参加した住民182名を対象とした。

2. 2. 5 用語の定義

研究目的にある地域住民とは、会場となった「まちの保健室」周辺を含めたA市に居住する住民を示し、住民は居住地域を問わず、「まちの保健室」に参加した住民をあらわす用語として用いることとした。

2. 2. 6 データの収集方法及び項目

住民の健康課題については、看護師が実施した健康相談の記録をデータとした。内容は血圧値、相談内容、看護師の判断及び指導内容である。健康増進サービスが住民に及ぼした影響は、参加者の自記式質問紙調査を用いた。質問項目は、性別、年齢、居住地、参加に至った周知方法、参加満足度（4件法）とその理由（自由記載）及びまちの保健室に望む事（自由記載）であった。

2. 2. 7 倫理的配慮

健康相談票及び住民自記式質問紙は個人情報が含まれ

地(知)の拠点 千葉科学大学 看護学部

「まちの保健室」を開設！

千葉科学大学は、平成28年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に「防災・郷土教育を積み上げた、人に優しく安心して住める地域づくり」というテーマで採択され、銚子市及び関係団体と連携して、地域の課題解決に取り組んでいます。

その一環として看護学部が、「まちの保健室」を開設します。血圧測定、健康や介護に関する相談のほか、健康講話や下記プログラムを用意しております。お気軽にお立ち寄りください。

日程	プログラム(予定)
7月9日(日)	ストレスとアロマ・ハンドマッサージの効用
9月10日(日)	転倒予防について 簡単な運動テストと体操
10月8日(日)	骨粗しょう症を予防しよう 歩き方や食事
11月19日(日)	冬の感染症予防と対応
12月10日(日)	子育てを楽しもう
平成30年 1月14日(日)	認知症の予防と介護のポイント

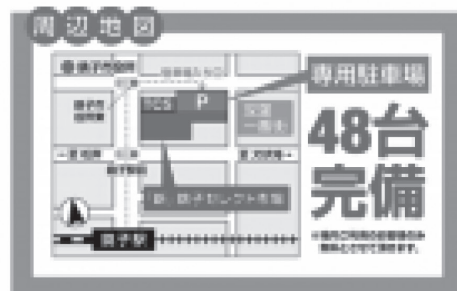
○開設時間: 午後1時～4時(プログラムは午後1時半～2時頃実施)

○開催場所: 千葉科学大学 エクステンションセンター
銚子セレクト市場内(下記マップ参照)

○対象: どなたでも参加OK

○参加費: 無料

看護職を目指す人の
「進学相談」「復職相談」同時開催！
「看護職」を目指す高校生や社会人の方の参加、相談を歓迎します。
教員、学生、現職の看護師が対応
地元の看護を取り巻く現状を知るチャンスです。



【問い合わせ先】
千葉科学大学 看護学部
安藤 電話0479-30-4575

図1 平成29年度 まちの保健室チラシ



図2 7月 学生によるアロマ・ハンドマッサージの実施



図3 11月 学生による冬の感染症予防と対応の健康教育

ないように作成した。参加者には調査の趣旨と記入は任意であることを説明し、質問紙の提出をもって同意とした。

2. 3 結果

2. 3. 1 参加者の状況

参加総数は延182人であった。各月ごとの参加数等を表1に示した。毎月の参加数は19人～37人で、平均30.3人であった。乳幼児18人を除いた成人164人の中で健康相談を利用した者は84人（51.2%）だった。

質問紙の配布数は164人で回収は148人、回収率は90.2%であった。148人のうち、初回参加者が137人（92.6%）、2回目が6人（4.1%）とほとんどが初めての参加で継続参加者は少なかった。参加者の年代は60歳以上が73人（49.4%）と半分を占め、40歳代・50歳

代が34人（22.9%）、20歳代・30歳代は17人（11.5%）であった。参加のきっかけとなった周知方法は、会場隣の商業施設を訪れた客への学生による呼び込みが71人（48.0%）で、町内回覧・広報等を見て参加した住民は少なかった。周知方法ごとの参加数を表2に示した。住所地は、A市内が96人（64.9%）、近隣市が26人（17.6%）、その他19人（12.8%）で市内在住者が多かった。

2. 3. 2 参加者の健康課題の把握

健康相談を利用した84人のうち、現病歴がない者は47人（56.0%）で、治療中の者は25人（29.8%）、治療中断者1人（1.2%）、不明10人（11.9%）であった。治療中の病名は高血圧が88%を占めていたが、降圧剤等の薬物療法等により測定された血圧値も正常値か血圧高値であった。その他の疾病は糖尿病、血清脂質異常、心房細動、バセドー氏病、頸椎症、骨粗鬆症、喘息であり、継続的な支援が必要と判断される住民はいなかった。看護師は住民による血圧測定や服薬遵守など自己管理が適切であることを承認するとともに、減塩などの食事や運動指導、治療の継続、健康診断の勧めを行った。

2. 3. 3 参加者の満足度と健康づくり学習の様子

参加者の満足度は、非常に満足92人（62.2%）、まあまあ満足49人（33.1%）及び未記入7人（4.7%）でほとんどが満足と回答した。満足度の理由に書かれた記述を内容の類似性でまとめると、アロマセラピーが気持ち良かった・親子で楽しく製作できた等体験そのものが良かったという意見が18件（26.9%）、学生やスタッフによる病気や対応法の説明がわかりやすかったという意見が21件（31.3%）、自分の健康を振り返る機会になったという意見が8件（12%）、健康に気をつけたいという意見が13件（19.4%）挙げられていた。月ごとの自由記載の集計結果を表3に示す。

1月には、自分の住む地域で認知症カフェを開催したいという住民が参加しており、その場で地域包括支援センター職員と打ち合わせを行った。後日確認したところ、認知症カフェを開始していた。

「まちの保健室」に対する意見・要望欄の記述は24件あった。内容は、今後も続けてほしい12件、健康に関する学習（食事・熱中症）や健康度測定（体力測定・血管年齢）などを希望する7件、困ったことを相談できる場所・多世代交流の場・手芸をやりたい・バドミントン・障害児支援のレモネードスタンドをやってはどうか各1件であった。

表1 平成29年度 まちの保健室実績

日程	教育プログラム	内容	参加数	健康相談者	学生数	スタッフ数
7月9日	ストレスとアロマハンドマッサージの効用	学生がポスターで説明後にアロマハンドマッサージ	25	18	6	3
9月10日	転倒予防について てんとう虫テスト	学生による運動機能チェックとPTIによる個別指導	29	25	6	3
10月8日	骨粗しょう症を予防しよう 歩き方や食事	学生がポスター・パンフレットを用いた説明と食生活チェック	35	32	5	4
11月19日	冬の感染症予防と対応	学生が感染症の説明とマスクの正しい付け方、嘔吐物の処理方法をデモ	19	9	6	4
12月10日	子育てを楽しもう クリスマスリースづくり	マカロニで作るクリスマスリースを作成	37	0	0	4
1月14日	認知症の予防と介護のポイント	認知症の知識、予防、介護の3つのコーナーを地域包括支援センター職員、認知症コーディネーター、脳若トレーナーが担当し解説	37	0	0	13
合計			182	84	23	31

表2 周知方法（複数回答）N:148

項目	人数	%
町内回覧	2	1.4
ちらし	22	14.9
大学HP	0	0.0
友人・知人	21	14.2
掲示・のぼり	8	5.4
呼び込み	71	48.0
地方紙	9	6.1
広報	5	3.4
その他	1	7.4
未記入	5	3.4

表3 満足度の理由に記載された自由記述のまとめ N:67

実施月	要約	数
7月	とても気持ちがよかった	8
	リラックスできた	5
	学生が明るく一生懸命でよかった	2
	自分の体のことを考える機会になった	1
	アロマに興味を持った	1
	仕事に取り入れたい	1
	9月	運動不足を感じた
思っていた以上に老化が進んでいることに驚いた	3	
10月	学生の説明がわかりやすかった	6
	食事や運動に気をつけたいと思った	6
	日光浴が足りないと思った	1
	自分の健康は自分で守ろうと思った	1
	酒やタバコが骨粗しょう症の原因になるとわかり今後気をつけたい	1
11月	学生が丁寧な説明で分かりやすかった、大変参考になった	5
	今まで適当にやっていたが、正しい方法が分かったので気をつけたい	4
	細かい質問にも笑顔で説明してくれた。みんな笑顔でよかった	2
12月	親子で楽しく製作できて楽しかった	5
1月	寸劇や説明が分かりやすく参考になった	10
	介護しているが、改めて接し方が重要だと反省した	1
	オレンジカフェを開催するにはどうしたら良いか	1

2. 4 考察

2. 4. 1 地域住民の健康課題の把握

参加者は健康か治療中であっても問題がない者がほとんどであり、特別な健康課題は把握できなかった。先行研究においても、参加した住民の健康度や健康意識が高い者が多いという知見がある^{6) 7)}。本学の「まちの保健室」は特に隣接する商業施設を買い物又は観光で訪れた住民を対象にしていることから、参加者の健康度が高かったと考えられる。健康度が高い住民であっても、看護職が治療中の住民の健康状況を確認し、行なっている健康管理方法を認めて励ますことは、健康状態の維持に寄与したと思われる。

また、計画では「まちの保健室」が周辺地域住民の健康相談の機会となり、地域住民の健康課題が把握できるのではないかと期待し、周辺の町内や民生委員にチラシを配布したが、会場周辺地域からの参加者はほとんどいなかった。

これらの点から、「まちの保健室」を手段として地域住民の健康課題を把握することは困難であることがわかった。

2. 4. 2 健康増進のためのポピュレーションアプローチの機会

「まちの保健室」参加のきっかけは学生の声かけが多く、健康への関心度も多様であったが、参加者の満足度は高かった。参加者は自分の健康管理方法を振り返ったり、知識や技術を学ぶことができおり、健康度の高い住民に対する健康増進のためのポピュレーションアプローチとして有効であったと考えられた。「よどまち保健室」⁸⁾ や「暮らしの保健室」⁹⁾ のように医療機関や訪問看護ステーションによる常設型の保健室でない場合は、継続的な支援が難しいため、長期的な効果を得ることは難しいが、来場を待つ受身の姿勢ではなく、商業施設の隣という立地条件を生かし、積極的に買い物客に声をかけ、1次予防である健康増進を学んでもらう機会とすることができる。

また、観光目的など県外・市外からの参加者もいたことから、A市の住民への貢献という地域を限定した機能ではなく、A市を訪れる観光客に保健サービスの提供を行なうことでA市に良いイメージを持ってもらうことができるため間接的な地域貢献の一助となったのではないかとと思われる。

3. 研究2

3. 1 研究目的

「まちの保健室」に従事した学生への教育的効果を明らかにすることである。

3. 2 研究方法

3. 2. 1 研究デザイン

記述統計及び質的記述的分析を行った。学生調査票の数値データは単純集計を行なった。学生調査票の自由記述及び教員が行なった意図と行動のデータは類似する内容を要約し、カテゴリ化した。

3. 2. 2 データ収集期間

平成29年5月～平成30年3月であった。

3. 2. 3 研究対象者

学生ボランティア11名、主宰した教員1名（筆頭研究者）である。学生ボランティアは12名であったが、1名は体調不良を理由に休んでいたため除外した。

3. 2. 4 データの収集方法

学生には、平成29年度の本活動が全て終了した平成30年2月に無記名の自記式質問紙調査を行った。調査内容は、参加動機（選択式、複数回答可）、参加して学んだこと・考えたこと（自由記載）及び参加後の自己評価であった。自己評価項目は、保健師教育課程の卒業時到達目標を参照して8項目で作成した。各項目は4段階（A. とてもそう思う～D. まったく思わない）で評価するよう依頼した。

教員のデータは、平成29年5月から平成30年2月14日までの間に、学生に対して教員が行なった行動と行動の意図、留意したこと及び結果を時系列で一覧表を作成した。内容は、毎回終了後に実施した反省会の議事録、教員が記録していた研究ノートをもとに記述した。

3. 2. 5 倫理的配慮

参加する学生の募集は、3年生・4年生全員に口頭で説明し文書を配布した。参加した学生に質問紙調査を行う際は、研究の趣旨と方法、調査票に回答しなくても成績に関わらないこと、無記名で学生は特定されないことを文書と口頭で説明した上で、成績入力が終了した時期に調査を行った。調査票は個別の封筒に入れて配布し、封をした封筒を提出者がわからない方法で回収した。質問紙調査の回答を持って同意とした。なお、本学の倫理審査委員会で承認を得た。（承認番号No.29-11）

3. 3 結果

3. 3. 1 教員が学生に対して行った教育的支援

教員の意図と行動を時系列で書き出し、行動の内容を教育的支援の目的の観点からカテゴリ化したものを表4に示す。サブカテゴリは20得られた。サブカテゴリの共通性によりグループ化し、カテゴリとして命名した。カテゴリ同士の関係性を分析した結果、教員が学生に対し

て行った教育的支援の構造は図4として示された。カテゴリを【 〃 】,サブカテゴリを()で示す。

教員は、3、4年生から募集するという(一定レベルの実践能力を持つ学生の確保)を【主体的活動レベルを決める前提条件】と決め、学生とともに開催した実行委員会では、(自己決定の尊重)と(過度の負担への配慮)により、学生に担当月と内容を決めるよう促した。さらに、事前に担当したプログラムの準備状況を確認し、準備ができていない場合は(成功を優先した準備プロセスの代行)を行ったり、(学生の能力に合わせた教育媒体の活用)を勧めるなど【学生の能力に合せた教育的支援】を行った。また、当日に反省会を開催し、【学生による自己評価の尊重】と(体験の意味づけと承認)など【学生の体験のリフレクションの促し】を行っていた。

これらの行動の基盤になっているのは、(自発的な参加の推進)と(自己決定の尊重)という【教員が基本にしている理念】であった。

3. 3. 2 学生ボランティアの変化

学生ボランティア11人に自記式質問紙調査票を配布し、10人から提出があった。(回収率91%)

「まちの保健室」に参加した動機を5項目提示し、優先順位をつけてもらったところ、1位は「将来役に立つ経験ができると思ったから」であり、2位は「看護技術を高めたいから」、3位は「地域住民の役に立ちたいから」であった。仲間からの誘いや教員から勧められたという理由の順位は低かった。(表5)

実践能力の向上に関する自己評価をみると、Aの「とてもそう思う」と回答した学生が一番多かったのは、「地域に向いた保健活動の理解が深まった」で7人(63.6%)、次に「保健師の専門性に対する理解が深まった」の5人(45.5%)であった。また、「個人の健康増進のための知識が増えた」「集団の健康増進のための知識が増えた」「個人の健康増進のための技術が向上した」「集団の健康増進のための知識が向上した」は、全員がAの「とてもそう思う」またはBの「そう思う」

表4 学生に対して教員が行なった行動と結果

月日	実施項目	行動の意図、留意したこと	結果	サブカテゴリ
H29.5.13	学生ボランティアの募集	初めての企画のため、ある程度知識や技術を習得している3,4年生に声をかけた。	4年生86名にボランティアを募集し希望者6名を得た	学生の実践能力レベルの確保
H29.5.18	募集		3年生78名にボランティアを募集し希望者6名を得た 参加希望者は少なかったが、会場も狭いため、追加募集はしないことにした	自発的な参加の促進
H29.6.11	実行委員会の開催	まちの保健室の目的を学生と共有し、学生が主体的に企画運営できるように実行委員会を開催した	4年生は実習が終了する10月・11月、3年生は実習が始まる前の7月・9月を担当することになり、学生が担当する月のプログラムを決めた。 6回全てで学生が担当することを予定していたが、学生の負担を考慮し、希望する回数とした。	自己決定の尊重 過度の負担への配慮
H29.7.6	第1回開催準備	アロマ・ハンドマッサージは、学生が自主的な研究会に参加して技術を修得していたため任せた	準備状況を確認したところ全くできていなかった。時間がなかったため教員が主導し、役割分担、物品を準備した。	成功を優先した、準備プロセスの代行
H29.7.9	第1回反省会	学生の体験を把握すると同時に、運営スタッフと一緒に改善策を考えることが重要と考えた。また学生の良いところはほめて次回への意欲に繋げることを意識した。	学生自身による説明が不十分だったという反省が多く挙がったため、反省は大切と受け止め、「良かった」というアンケートが多かったことを紹介し、ねぎらった。	学生による自己評価の尊重 肯定的な教員評価の提示
H29.8.9	第2回開催準備	夏季休暇に入るため、早めの準備を促すためこと、3年生の様子からリーダーシップを取る学生がいないことがわかったため、オリエンテーションシートを用意し話し合いを促すようにした	オリエンテーションシートに役割分担を学生が決めて教員に持参したの で、担当検査項目の予習しておくよう指導した	学生の能力に合わせた教育媒体の活用
H29.9.10	第2回反省会	担当した役割が十分果たせたか学生の自己評価と、PT等による評価を出し合い改善策を考える機会にする。	学生からうまく測定できなかった反省と、1回目の経験をふまえて受付を工夫したという意見が出た。PTからは転倒事故もなく測定できたことをほめていただいた。測定方法については、教員が個別に十分サポートできなかった点があり、技術の評価はせず、工夫した点や学生から改善案の提案があったことをほめ、看護におけるPDCAサイクルの意義を伝えた。	学生による自己評価の尊重 他の専門職による肯定的評価への合意 学生の自己評価の意味づけ
H29.9.19	第3回開催準備	4年生はリーダーシップを取れる学生がいたため、打ち合わせ会を企画せずプログラム案を作成するよう指示した	プログラム案を持参したが、骨粗しょう症の説明がなかったため、調べて追加することを指導した。8日後に学生が危険度チェック、リーフレット、骨折しやすい部位の説明用ポスターを持参。媒体の印刷は教員が行ない、当日の役割を決めておくよう指導した。	学生の主体的活動の承認と不十分な部分への限定的な指導
H29.10.8	第3回反省会	4年生は初めて担当したため、まず体験を聞くことを重視した	学生は、参加者をほめながら行なうことの大切さや、本人の話を聞きながら説明すればよかった、既往のある人への指導内容がわからなかったなど具体的な指導方法についての気づきを語った。看護師から「堂々としていてわかりやすい、参加者も安心したと思われる」等とほめていただいた。教員も同じ評価を伝えた。またわからなかったことはすぐに調べておくように指導した。	学生による自己評価の尊重 他の専門職による肯定的評価への合意 学生が体験から得た学習意欲の促進
H29.11.7	第4回開催準備	11月のプログラムについて打診したところ悩んでいた学生は、卒業研究で時間や気持ちにゆとりがないと判断し、可能な部分のみ担当させることにした	ノロウイルス処理の道具とマスクは教員が用意し、パンフレットを学生が考えることになった	学生の心理状態に配慮した介入
H29.11.19	第4回反省会	2回目であり、前回の体験をふまえてどのように工夫したのかを聞くようにした	学生は、想定していなかった質問が出て答えられなかったという意見が多数あった。前回の反省点をふまえて意識して指導しうまくできたという意見もあった。看護師からは学生の説明技術が上手であるとの評価があったが、教員の反省点としてデモ演習が不足していたことを伝えた。	学生による自己評価の尊重 学生の課題の要因としての教員自己評価の提示
H30.1.26	学生アンケート依頼	3年生にアンケート依頼	6名に配布し5名から提出があった	学生による自己評価の促進
H30.1.29	アンケート依頼	4年生にアンケート依頼	5名に配布し5名から提出があった 1名は体調不良で長期欠席中のため配布しなかった	
H30.2.14	学内発表	成果を発表することで、活動に参加した達成感と次年度への参加意欲を促進したいと考えた	学内で行なわれたCOC報告会で教員と3年生2名が取り組みを発表した。	体験の意味づけと承認

と回答していた。一方でCの「あまり思わない」という評価があった項目は、「住民への保健指導に自信が持てるようになった」2人(18.2%)、「チームの一員としての役割を主体的に発揮できるようになった」1人(9.1%)、「地域に出向いた保健活動の理解が深まった」1人(9.2%)であった。(表6)

まちの保健室に参加して学んだこと・考えたことという項目の自由記述は21あった。記述内容を要約し質的に分析した結果、8つのカテゴリが抽出された。要約を「」、カテゴリ【 】で示す。学生は、「参加者の声がうれしかった」と【参加者の反応から得た喜び】を感じるとともに、「運動など健康管理に取り組んでいる人が思ったより多くいた」など【住民の健康管理方法への気づき】を得ていた。学生自身が健康教育を経験するこ

とで【健康教育方法の理解】ができ、「住民自身の健康対処行動を尊重した健康教育方法を学ぶことができた」「住民の理解度や興味に併せて説明を変化させる事が大切であることを学んだ」など【効果的な教育方法の考察】と「狭い場所なので効率的な方法が大切」などの【効果的な運営方法の考察】を行っていた。また、「住民と多く接することでコミュニケーション力が向上した」など【自己の看護実践能力の向上に対する認知】を行っていたが、一方で「知識が不十分で自信を持って指導できなかった」と【知識不足の認識】もしていた。さらに「短時間で住民の満足度が得られる指導技術を向上させたい」と【効果的な指導技術向上への意欲】を高めていた。(表7)

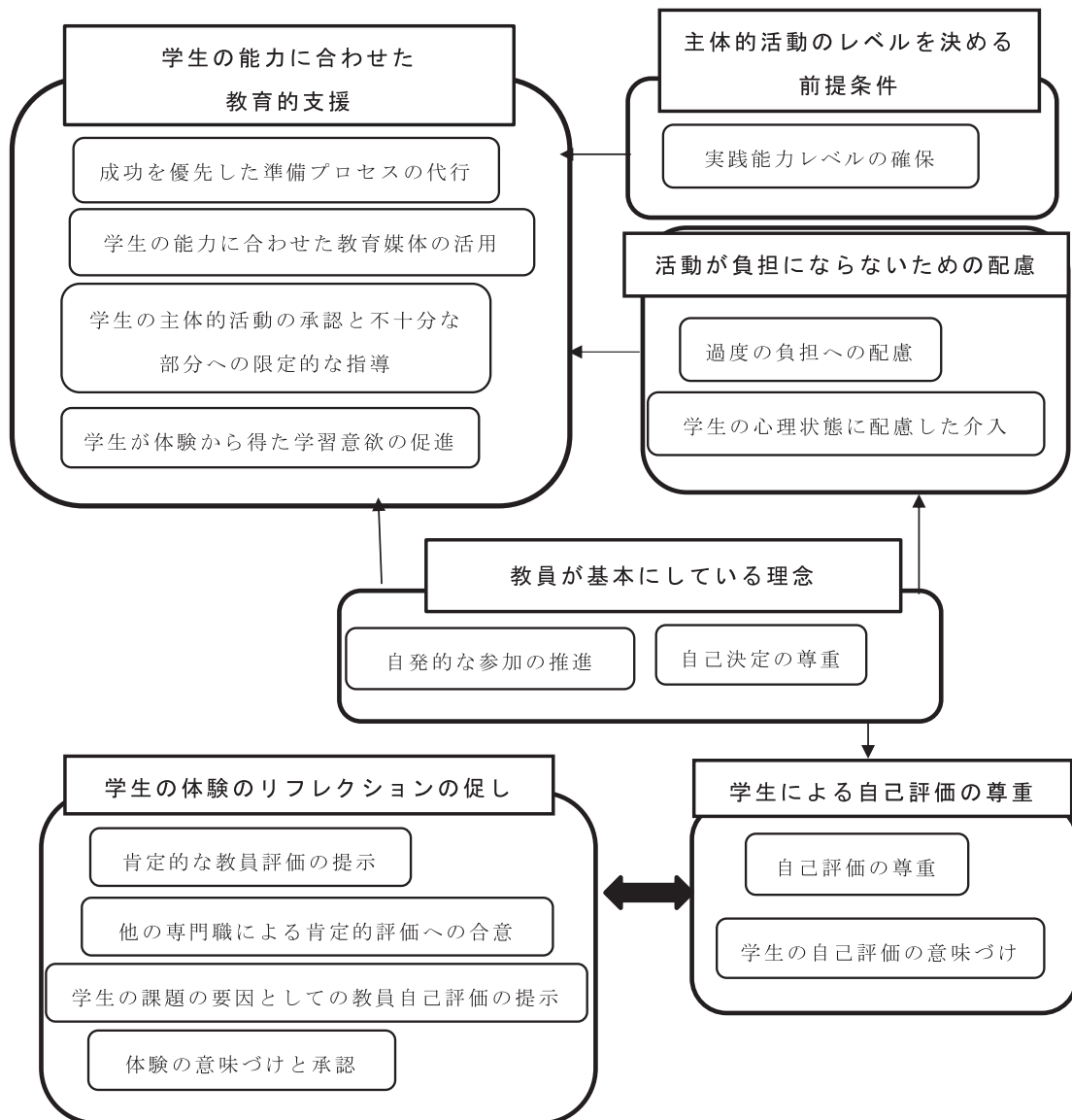


図4 教員が学生に行った教育的支援行動の構造

表5 学生の参加動機 N:10
一番上の行の数字は学生IDを示す

参加動機	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	順位
職員に勧められたから	4		1				5				5
仲間から誘われたから	3		5				4		1	2	4
自分の看護技術を高めたいと思ったから	5	1	4	1	2	2	2	1			2
地域住民の役に立ちたいと思ったから	2	2	3		3	3	3				3
将来役に立つ経験ができると思ったから	1	3	2	2	1	1	1	2		1	1

表6 学生による参加後の自己評価 N:10
Aとてもそう思う Bそう思う Cあまり思わない D思わない

項目	A	B	C	D
個人の健康増進のための知識が増えた	1	9	0	0
集団の健康増進のための知識が増えた	3	7	0	0
個人の健康増進のための技術が向上した	4	6	0	0
集団の健康増進のための技術が向上した	3	7	0	0
住民への保健指導に自信が持てるようになった	1	7	2	0
チームの一員としての役割を主体的に発揮できるようになった	2	7	1	0
地域に出向いた保健活動の理解が深まった	7	2	1	0
保健師の専門性に対する理解が深まった	5	5	0	0

表7 学生の学びの内容

要約	カテゴリ
参加者の声がうれしかった	参加者の反応から得た喜び
住民の健康管理方法の共通性に気づいた	住民の健康管理方法への気づき
運動など健康管理に取り組んでいる人が思ったより多くいた	
健康教育の企画、運営方法の理解が深まった	健康教育方法の理解
住民自身の健康対処行動を尊重した健康教育方法を学ぶことができた	効果的な教育方法の考察
住民が継続して健康学習に参加する方法を考えるきっかけになった	
住民の理解度や興味に合わせて説明を変化させることが大切であることを学んだ	
健康に関心があっても健康増進の方法がわからなかったり、行動に移せていないなど様々な段階の人がいるため、個人に合わせた指導が必要対象を限定しないポピュレーションアプローチでは、参加者の健康問題に合わせた対応が重要	
健康教室に関心を持ってもらうためには、健康知識を活用した働きかけが必要	効果的な運営方法の考察
健康教育に血圧測定を併設することは参加者の増加につながる有効な方法であると学んだ	
狭い場所なので効率的な方法が大切	
健康に無関心な人への知識の普及は地道な努力が必要	自己の看護実践能力向上に対する認知
実習の経験が生かされた。	
住民と多く接することで、コミュニケーション力が向上した	
担当したテーマに関する知識が補強できた	知識不足の認識
知識を確認する機会になった	
知識が不十分で自信を持って指導できなかった	知識不足の認識
住民のニーズに対応するには知識が必要であることがわかった	
短時間で住民の満足度が得られる指導技術を向上させたい	効果的な指導技術向上への意欲
参加の呼びかけや指導がうまくできず、もっと技術を身につけたいと思った	

3. 4 考察

3. 4. 1 学生の主体的な学びを促進する教育的支援のありかた

学生の自己評価と学びの記述内容から、「まちの保健室」は学生の教育の機会として有効であった。その理由として、参加学生を集める方法が公募であったことと、学生がプログラムを企画し運営する手法が、「将来のために役立つ」「看護技術を高めたい」という主体的で意欲を持つ学生が参加したことが考えられる。教員による学生への教育的支援方法をみると、(自発的な参加の推進)と(自己決定の尊重)という【教員が基本にしている理念】をもとに学生に主体的に企画・運営をさせたいと思い、学生の負担感や達成度の違いに対して、準備段階では【活動が負担にならない配慮】や【学生の能力に合わせた教育的支援】が主体性の発揮につながったと思われる。

また、学生は健康教育の経験により、不十分な知識や未熟な技術に気づき、反省会では学生から反省点が多く挙げられた。そこで、教員は不十分な点をさらに指摘するのではなく【学生による自己評価を尊重】するとともに【学生の体験のリフレクションの促し】を行ない、学生は【効果的な指導技術向上へ意欲】をもった。この教員の行動は、Gibbs¹⁰⁾のリフレクティブ・サイクルにおける経験の評価と分析、行動プランの段階を促進する行為であり、学生が今回の経験から看護実践家として必要な行動を学ぶ機会になったといえる。

しかし、自己評価結果において保健指導に自信がもてない学生も約2割いたことから、自信を持って保健指導できるほど事前の準備が十分ではなかったという課題も明らかになった。

学生の自発的な参加による「まちの保健室」であっても、正規カリキュラムにおける臨床実習と同様に、学生が正確で安全な支援ができることを目指す必要がある。鈴木¹¹⁾は新しい看護教育のベースとなる「人間の成長に求められる修得知モデル」を考案し、そのための効果的な教育方法の1つに「プロジェクト学習」を上げている。プロジェクト学習とは学習者がゴールに向かう8つの活動(フェーズ)を能動的に行なうアクティブラーニングで、活動毎に身につく力も示されている。「まちの保健室」もプロジェクト学習のように活動フェーズとフェーズ毎に修得させたい看護実践能力を示すことで、更なる成長を促進できると考える。

4. 総合考察

4. 1 関係機関との協働による住民サービスの向上

3つの活動目的を設定して開始した「まちの保健室」は、地域住民の健康課題の把握はできなかったが、住民に対する健康づくりを目的としたサービスの提供と学生

の教育の機会として有効であった。また、関係機関と協働することで、当初に想定していた活動目的以外の成果もあった。看護協会の報告¹²⁾にある「まちの保健室」の機能にも「必要なサービス機関や関係機関との連携」、「NPOや市民グループとの連携の場」が挙げられている。今後は関係機関との連携により「まちの保健室」が関係機関と住民をつなぐ機能も追加することで更なる住民サービスの向上になると考える。

4. 2 本研究の限界と今後の課題

本研究はA市における実践を評価したものであり、多様な目的をもつ「まちの保健室」のあり方として一般化することは難しい。また、学生に対する教育的効果を学生による自己評価のみで分析したため、教員による客観的評価も追加する必要がある。今回明らかになった「まちの保健室」の成果を踏まえ、住民の健康づくりと学生への教育の機会として、さらに充実させていきたい。

謝辞

「まちの保健室」に参加した学生ボランティア、協力していただいた地域の関係者の皆さんに感謝します。また、本研究の一部は、平成30年8月の第21回日本地域看護学会で公表しました。

参考文献・引用文献

- 1) 日本看護協会ホームページ <https://www.nurse.or.jp/home/event/simin/zenkoku/index.html> (2018/9/26)
- 2) 日本看護協会編：平成14年版看護白書，日本看護協会出版会，2002.
- 3) 国際まちの保健室（兵庫県立大学） <http://kokusaimachi-ho.hateblo.jp/> (2018/9/26)
- 4) 子育て支援まちの保健室（神戸常盤大学） www.kobe-tokiwa.ac.jp/univ/news/170418_machiho_kosodate.pdf (2018/9/26)
- 5) 三浦藍他：神戸市看護大学“まちの保健室”『こころと身体の看護相談』の活動実績とその評価，神戸市看護大学紀要，Vol.16，69-76，2012.
- 6) 伊藤順子他：「まちの保健室」参加住民の健康意識—拠点型における健康意識調査と全国調査の比較を通して—，鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要第73号，45-51，2016.
- 7) 稲田千明他：「出前・イベント型まちの保健室」に参加した住民の健康意識に関する調査，厚生の指標第64巻第15号，19-26，2017.
- 8) よどまち保健室 <http://www.machi-care.jp/service/health-care/> (2018/9/26)
- 9) 暮らしの保健室 <http://www.cares-hakujuji.com/service/kurashi> (2018/9/26)
- 10) クリス・バルマン他編，田村由美他監訳：看護における反省的实践，看護の科学社，191-121，2014.
- 11) 鈴木敏恵：アクティブラーニングをこえた看護教育を実現する，医学書院，2016.
- 12) 日本看護協会編：平成14年版看護白書，日本看護協会出版会，4-5，2002.